

「八月の銀の雪」 伊与原 新

1. 伊与原新との出会い

私がこの作家と出会ったのは、東京オリンピックが中止になった令和2年、新型コロナの流行で何もすることがなく司馬遼太郎や樋口一葉も読み飽き、とも角知らない作家の本を読んでみようとして西荻窪図書館でふと「ルカの方船」という不思議なタイトルに魅かれて手にしたのが最初でした。

この本は、基本的にはミステリー（大学教授殺人事件）ですが、その背景に地球の生命源は隕石により宇宙から飛来したという途方もない話があって一気に読み通し、その後も図書館の伊与原の作品を在庫の限り読み漁った次第です。

2. 伊与原新の略歴

1972（昭和47）年大阪生れ。神戸大学理学部（地球科学科）卒業後、東京大学大学院（理学系研究科）博士課程修了。専門は地球惑星物理学。2003年より富山大学理学部に助教として勤務。

2010年「お台場アイランドベイビー」で、横溝正史ミステリ大賞を受賞して小説家デビュー。同年「ルカの方船」が56回江戸川乱歩賞の最終候補作となった。2014年「磁極反転の日」の後、2019年「月まで3キロ」で新田次郎文学賞を受賞、2021年「八月の銀の雪」で164回直木賞候補となる。

本当は「ルカの方船」を取り上げる積りでしたが、残念ながら文庫本として出版されておらず現時点でよく店頭には置かれている2019年以降の文庫本二冊が候補となりました。

「月まで3キロ」にするか迷いましたが「ルカの方船」が宇宙からの生命体の飛来に対し、地球の内部にもう一つ星があるという途方もない内容が、いかにも伊与原らしいと判断しました。

3. 「八月の白い雪」の構成

この本は短編集で、表題の「八月の銀の雪」を含め5編が収められていますが、全てに共通しているのが、主人公が落ち込んでままならない人生を送っている中、偶然の出会いで自然科学の知に触れることにより希望を得るというパターンで、それを簡単に図式化すると以下の通りです。

（左側がさえない主人公 ⇔ 右側が「科学の知」をもたらす相手）

- ① 就職が決まらずマルチ商法に係わる大学生 ⇔ コンビニでバイトするベトナムの天才留学生
- ② 病弱の幼い娘を抱えるシングルマザー ⇔ 国立科学博物館でクジラなどの展示画を描く嘱託員
- ③ 不動産会社の契約社員（元劇団員） ⇔ 迷い鳩（実はアルノー19号）に餌をやる老女
- ④ 一年前に恋人と別れた販売会社代理店のOL ⇔ 珪藻のガラスで芸術品を作る引き籠りの青年
- ⑤ 事故隠蔽を機に退職した原発の保守管理会社社員 ⇔ 気象庁OB（風船爆弾開発者の息子）

→登場人物すべてが社会的に恵まれない人々で、いわゆる「お金持ち」は一人もいませんでした。

4. イング・レーマンについて

この短編集で世界的に高名な科学者を直接紹介しているのは、表題の「八月の銀の雪」の P38 に出てくるグエンが探していた論文の著者 (I.LEHMANN) で、グエンの言葉を通して研究内容や業績が紹介されていますが、これが大変な女性科学者でした。(以下は Wikipedia の要約)

インゲ・レーマン (Inge Lehmann) 1888~1993 は デンマークで生れ、父親は実験心理学者。コペンハーゲン大学やケンブリッジ大学で数学を学び、測地学者の助手となって地震に興味を持ちデンマークの測地機関の地震学部門のリーダーとなった。

1936 年 48 才の時に地震の P 波の内核による反射などについて、地表からの深さ 5150 km の所に内核と外核の境界面があるとする論文を発表。1953 年なんと 65 才でアメリカに渡り地球の地殻とマントルを研究し、深さ 190~250 km の所に境界面があることを発見した。

1993 年 104 才で亡くなった後、彼女の功績に因み 1997 年にアメリカ地球物理学連合は地球のマントルやコアの優れた業績に対して送られるインゲ・レーマン・メダルを創設した。(現在まで日本人の受賞は二人) とも角地味なデータ分析を長年積み重ねた研究者だったと思います。

5. この本で目からウロコの落ちる話

この本の科学的テーマの中で幾つ興味深い話がありましたが、私が初めて認識させられ正しく目からウロコが落ちた事柄を作品ごとに思いつくままに書き出すと、次の通りです。

- ① 地球の直径 (12,743 km) に対して、人間が掘った一番深い穴は地下 12 km。
- ② クジラが水に足を踏み入れるようになったのは五千万年前で、最初の姿は「頭の大きな犬」
- ③ ハトが方位を知るのは地磁気を利用するだけでなく、匂いの地図、音の地図まで使う。
- ④ 珪藻は食物連鎖の大もとで、そこから玻璃が取れること。
- ⑤ 原発の放射性物質の汚染は十万年続くが、それは氷期と間氷期のサイクルと同じ。

6. 終わりに

この短編集は、科学の世界と人間ドラマを自然に融合させているところに特徴があるのですが、私が最初に読んだ「ルカの方舟」は推理小説の要素が強かったのに対し、作風が相当変わっている印象を受けました。そして今回紹介できなかった「月まで3キロ」は小説 (人間ドラマ) としての完成度が高いと感じました。

最近、図書館から借りるのではなくネットで購入した「青ノ果テ」は全く異なるスタイルの小説でした。科学の世界と人間ドラマに「宮沢賢治の解釈」が加わっており、花巻農芸高校・地学部の3人が自転車で賢治の足跡を辿る「青春もの」です。伊予原の新しい姿だと思えます

高橋あかねさんから、新潮社の「波」に「翠雨の人」という日本の女性科学者の先駆家になった猿橋勝子の物語を連載しているとの情報がありました。これからは楽しみです。